この写真は登場人物のセリフからイメージしたものです。実際の舞台衣装とは異なります。

悲劇「春琴抄逆張り」にみる二つの振り子 —耽美と許し —

山梨県立大学教授
坂本 玲子

人の感情は振り子のように揺れる。誰もが経験することである。愛を求める感情が強ければ強いほど、反対に振れたときの憎しみも大きくなる。恋においては激しく揺れる振り子のエネルギーが、耽美な夢、鮮やかな幻覚をもたらす。

物語に出てくる女は男の顔を「あまりに美しく輝いている」と見つめ、輝く光の中に吸い込まれそうになる。男は女の瞳に遠い宇宙の碧い惑星を見て、生のすべてをそこに集約させる。それまで積み重ねてきた現実の「実」は反転して「虚」となり、振り子のエネルギーの中心へと狂気・貪欲さ・絶望・悲嘆を巻き込んでいく。

妻が「ずっと我慢してきた」と言い、夫が「後悔の連続」と返す。それまで重ねてきた日常の会話らしい、小さな振り子だ。小さくても反対には揺れる。すなわち「許し」であり「希望」だ。こうした小さな振幅が夫婦の土壌に浸み込んでいる。「君にしてあげられることはそれだけだ。どんなことがあっても、僕は・・・」と呟く男の頭上に、古い子守唄が降り注がれる。

藤谷清六氏は、現実と虚構の中で揺れる二つの振り子について、舞台の上で繰り広げてくれる。どちらの振り子も、混じり合い溶け合うことなく、くっきりと描かれているところが潔い。

「春琴抄について」

藤谷　清六

昔、高校生の頃、谷崎潤一郎の『春琴抄』を読んで驚きました。この小説では、愛する女性の醜くなった顔を見なくてすむように、恋人の青年が自らの手で自らの瞳を針で潰し失明するということになっていますが、「そんな馬鹿なことがあるか、自分で自分の瞳を潰すなんてことはない！」と高校生の私は思いました。その思いは今でも変わりません。そこで『春琴抄』をヒントに全く逆の発想でこの脚本を書いてみました。私は今まで喜劇を主に書いてきましたが、今回初めて悲劇を書いてみました。ハッピーエンドではありませんが、ぜひ『甲斐善光寺』『甲府桜座』までお越し下さい。